

莓パニック 6

I c b i g o & S o u

風
fuu



目次

苺パンツク 6 5
～恋心編～

書き下ろし番外編
ふたりの恋は苺色 341

莓バニック 6

～恋心編～

プロローグ ～変わりつつあるふたり～

ひよんなことから宝飾店に勤めることになつた鈴木苺。店長である藤原爽は、貴族のようすに上品なひと。彼はなぜか苺に過剰に構つてくる。

爽は職場でも苺をみつちりと教育し、プライベートでも付きつきり。ふたりきりで年末始を過ごすうち、爽がいつも側にいることが苺にとっては当たり前になつていて。けれど、爽と親しげにしている女性を目撃した苺は、これまで体験したことのない想いに苦しめられることに……爽の存在は、苺の中でどんどん大きくなつていたのだ。爽のほうも、天真爛漫でとぼけた苺のことを愉快なおもぢやのように思つていたのだが、いつの間にやら、決して手放せないほど大切な存在になつていて、気に気づいた。さらに、苺の幼馴染である二ノ宮剛と苺の親しい関係に、激しい嫉妬を抱くことに。そして、雪の降る夜、爽が苺のえくぼにキスをしたことで、ふたりの関係はさらに特別なものに変わりつつあつた。

1 ちょっと残念な気分 ～苺～

正月過ぎ。鈴木苺は、店の中にある彼女専用の部屋でイラストを描いていた。これは、今月末に行われるセールに使う予定だ。

初売りセールのあと、苺を含めた会議が行われた。議題は売れ残つてしまつた福袋の商品をどうするか。苺がラップピングしたものとそのまま有効活用して、新たな戦略で客寄せをするべく、『新春宝箱セール』と銘打つたセールをすることになつた。

会議に出るなんて、まるでキャリアウーマンになつたみたいで、最高の気分だつたんだけど……いつもと同じメイド服で参加させられたんだよね。できればスーツをびしっと着て臨みたかったのに。ほんと、店長さん、苺の気持ちをわかつてないんだから。この店の店長である藤原爽のことを考えた途端、彼女は切ない気分になつた。

昨日の夜、ふたりでコーヒー牛乳を買ひにコンビニに行つた。その帰り道に、店長さんが、ずっと一緒にいようつて言つてくれて……

すごく嬉しかったのに、すごく胸が切なくって、涙が出てきちゃつて……

一緒にいさせてくれるのかつて聞いたら、苺の望むだけつて答えてくれた。それで……
苺はそつと自分の頬に触れた。唇を押し当てられた感触を、まざまざと思い出してしまっ

た。顔が、カーッと燃えるように熱くなつた。

あれつて……店長さん、ふざけていただけなのかな？

あることがあつてから、どうにも店長さんを意識しちやつてさあ。

コンビニから戻つたあと、テレビゲームをしたんだけど、そのときも心臓が意味もない
くドキドキして……

藤原はいま、ここにはいない。藤原の部下のひとりであり、この店の店員も務めている岡島怜^{おかじまれい}と午後から外出してしまつた。

なんだかよくわからないんだけど……店長さん、いま、すつごく忙しいみたいなんだよね。そのせいか、ひどく疲れているように見える。大丈夫なのかなあ？

考え込んでいた苺は、我に返り、慌てて仕事を再開した。

ぼおつとしてちや駄目だよ。セールに間に合うように、イラストを描かないと……

「よし、今日はここまでにしとこうかな」

もう仕事を終える時間だ。今日はこれから、中学の同窓会に行くことになつてゐるの

でのんびりしていられない。そういうえば、店長さんはまだ帰つてきていないのかな？
帰り支度^{じだぐ}をする前に、確認しようとスタッフルームを覗いてみる。
……あ。

店長さんだと思つて声をかけようとしたら、藍原要^{あいはらかなめ}さんだつた。藍原さんは店長さんの一番の部下で、岡島さんと同じく苺の先輩さん。

藍原はパソコンに向かつていたが、苺がやつてきたことに気づいたのか、すつと顔を上げた。相変わらずお待さんみたいなつこいい。

「ああ、鈴木さん。お疲れ様です。そろそろ時間ですね」

「あの、店長さんは、まだ戻つてきてないんですね？」

「ええ。もうお帰りになる時間なんですが……遅いですね」

藍原は首を捻りながら言うと、苺に視線を向ける。

「これから同窓会に行かれるのでしょうか？」

「着替えなくていいのですか？」

藍原の言葉に従つて、更衣室に入ろうとしたら、いつのもようになつてスタッフルームに夕食が届いた。

「藍原さん、苺、夕食の準備しましょうか？」

盛り付けマスターを自負している苺は、張り切つて申し出たが、藍原は首を横に振る。

「それは彼らがやります。鈴木さんは着替えを……」

「そうですか？」

「ちよつぴり残念な気分で、苺は更衣室に戻った。

2 予期せぬ事態（爽）

やれやれ、ようやく帰れる。

仕事を終えた爽は、怜を従え、足を速めた。

会議が長引いてしまい、予定していた終了時刻を大幅に過ぎてしまった。
まさか、こんなに遅くなるとは……

苺を同窓会の会場まで送つて行く約束をしていたのに……もう間に合わない。

〔爽様〕

苛立つていると、後ろから怜が声をかけてきた。

〔なんだ？〕

「急いで、店に着くのは七時過ぎですね……鈴木さんとの約束は、どうなさいますか？」
思わずむつとしてしまう。そのことをさつきからずつと考えているというのに。

こうなつたら、自分の代わりに要に送らせるしかないだろう。だが……要に苺を任せたくない。なぜなら要は苺に好意を持つていてもしかれないからだ。

途中で席を外すことができれば、屋敷の執事頭である吉田善一に電話をして、苺を送るよう命じられたのに……

そのとき、後頭部にズキンと痛みが走った。爽は顔をしかめ、頭に手を当てる。

〔爽様、どうかなさいましたか？〕

爽を見て、怜が心配そうに声をかけてくる。

〔いや……なんでもない〕

頭痛がしたなんて口にしたら、怜を動搖させてしまう。頭痛の原因は、単なる寝不足だ。
苺と同じベッドでは、ぐっすり眠れなくなつてしまつたのだ。

……それでも、苺と離れていたくない。

〔はあ？〕

つい、疲労感の滲んだため息をついてしまい、爽はハツとして口元を押さえた。

〔爽様？〕

〔うん？〕

「わかりました」

怜は、すぐさま携帯を取り出し、要に電話をかけた。そして、テキパキと用件を伝える。

「怜」

「はい。なんでしようか?」

「後部座席に座らせろ、と伝えろ。それと、帰りは私が迎えに行くとも」

怜は頷き、爽が言った通りに要に伝える。

苺が、要の車の助手席に座るなんて許せない。愚かな感情かもしれないが……自分自身に落ち込んでいたそのとき、急に足の力が抜けた。

……なんだ?

ぐらりと身体が傾ぐ。

次いで激しい衝撃と痛みを感じた。

「そっ、爽様つ!」

怜の叫び声が遠くで聞こえる。

なんだ? 私はどうしたんだ?

頬が冷たい……

意識が薄まつてゆき、爽はゆっくりと目を閉じた。

3 ここは黙秘で（苺）

更衣室で髪を梳いていた苺は、スタッフルームから大きな声が聞こえ、驚いて耳を澄ませた。

……藍原さんの声?

苺は何かあつたのかと思い、更衣室を出てスタッフルームに向かった。

藍原は、携帯を手にしたまま固まっている。何やら、様子が変だけど……

通話中なら話しかけるべきではないだろうと思い、しばらく見ていたが、どうも通話は終わっているようだ。

「どうかしたんですか?」

そつと声をかけてみたら、藍原はハツとして振り返った。

「ああ、着替え終わつたんですね」

やはり通話は終えていたらしく、藍原は携帯をポケットに戻しながら言う。

「はい」

「いえ。たいしたことでは……それより、爽様から連絡がありましたよ」

「そうなんですか？ 店長さん戻つてくるんですか？」

「実は、予定通りには戻つてこられないようなのです」

「なんだ、帰つてこないのか……」

「仕事が延びているんですか？」

「そうではないようですが……自分の代わりに鈴木さんを送るようになると……」

「ああ、苺なら大丈夫ですよ。ひとりでも会場まで行けますから。藍原さんは用事があるんでしよう？」

「藍原は少し迷いのある表情をしたあと、首を横に振る。

「いえ、送らせてください。爽様に命じられましたので……」

頼み込むように言われてしまい、苺は甘えることにした。

藍原の車の後部座席に乗せてもらう。車はすぐに発進した。

苺は自分の身なりをチェックする。

クリスマスにお母さんがプレゼントしてくれた、クリーム色のニットワンピースを着てきたんだけど……おかしくないよね？ バッグはお兄ちゃんのお嫁さん、真美さんからもらったピンクのものだ。バッグを開け、剛からもらったお財布を見た苺は顔をしか

めた。

そういうえば……昨日、剛にはずいぶんと世話をかけちゃったな。

店長さんが綺麗な女性のお客さんに接客しているところを見たら……すっごくもやもやした気分になっちゃって。いたたまれなくなつて、お店を飛び出してしまつたのだ。歩いて家に帰つたら、剛と偶然会つて……。あいつの顔を見たら、どうにも気持ちが抑えられなくなつて泣いちゃつて。

う一つ、思い出すと恥ずかしい。

けど、電話してお礼を言つとくべきかな。あいつのおかげで落ち着くことができたんだし。

そういうや、藍原さんにも、みつともないほど動揺したところを見せちゃつたな……苺は、藤原からもらったピンキーリングを見つめた。

店長さん、帰りは迎えにきてくれるのかな？

苺は顔を上げ「藍原さん」と呼びかけた。だが、返事がない。

あれ？ 聞こえなかつたのかな？

「藍原さん！」

「あっ、大声を出してごめんなさい。聞こえなかつたみたいだから……」「そうでしたか。すみません。考え方をしていて……」

考え方？

「仕事のことですか？ 店長さんたちのことですか？」

「ええ、まあ」

藍原さんが、呼びかけられても気づかないほど考え方に入してはいるなんて……これってただ事じやないんじや？ むくむくと不安が湧いてくる。

「何か問題が起こつた訳じやないですよねえ？」

「……鈴木さん」

「あの、帰りは、店長さんが迎えにきてくるんですよね？」

確認するように聞くと、藍原は黙り込んだ。

「藍原さん？」

「爽様は、無理かも……しませんね。そのときは、私が怜のどちらかがお迎えに上がりますので」

莓は眉をひそめた。

これってやっぱり店長さんに何かあつたんじゃないの？

「藍原さん、店長さんに何が起こつたんですか？」

「困りましたね……どうやら、言葉の選択を間違えてしまつたようだ。鈴木さん、同窓会が終わつたら話しますから」

そんなの待つていられないよ！」

「聞かせてもらわないと、気になつちやつて、友達とのおしゃべりを楽しめませんよ」

そう言つたが、藍原は答えてくれない。莓は頬を膨らませ、携帯を取り出した。

このままじゃ埒らちが明かない。店長さんに直接電話をかけてやろう。呼び出し音が鳴り始める。莓の様子に気づいた藍原が「鈴木さん？」と慌てて声をかけてきた。

「いつたい誰に？ ま、まさか……爽様にかけているのではありませんよね？」

そのままかだが……ここは黙秘だ。

4 いただけないお迎え ～爽～

「そうはいきません。爽様、お願ひですから、おとなしくしていてください。もう着きますので」

「病院など行く必要はないと何度も言っている」

「駄目です。意識を失くして倒れたのですよ。精密検査を受けるべきです」

「あれはちよつとふらついただけだ。寝不足だったから……」

倒れたのは事実だが、すぐに意識は戻ったのだ。頭痛薬でも飲んで、一晩ぐっすり眠れば済む。なのに、怜はどうあっても爽を病院に連れていく気でいる。要からそうするよう指示されたに違いない。そういうしているうちに、車は病院に着いてしまった。

「爽様」

「はーっ！ もう諦めるしかないか……」

入院なんてことになつたら、最悪だ。仕事は滞るし、苺とも一緒にいられない。車から降りないでいると、怜が不安そうな顔をして、後部座席のドアを開けて覗き込んだ。

「車椅子を頼みましょか？」

爽は真剣な表情の怜を見て、腋量^{めまい}がした。車椅子で病院の中に運び込まれるなど、絶対に嫌だ。

「 unnecessary。歩いて行ける」

怜の身体を押しのけて車を降りようとしたら、携帯に電話がかかってきた。降りるのをやめ、かけてきた相手を確認する。

「爽様、いまは電話などしている場合では……うつ！」

爽は空いているほうの手で怜の口を塞いでやつた。

「黙つていろ！」

きつく命じ、携帯を耳に当てる。

「店長さん？」

苺の声が受話口から聞こえてきた。

「どうしたんです？ 同窓会は？」

「店長さん、大丈夫なんですか？」

「うん？」

「まさか、要に聞いたんですか？」

絶対に苺には言うなど、命じておいたのだが……

「ううん、何も教えてくれないんですよ。だから苺、すつごい不安になつて……それで電話したんですよ」

苺の言葉を聞き、口元がしまりなく緩む。

「私は大丈夫ですよ」

「なら、帰りは苺を迎えてこれるですか？」

爽は病院を見つめ、顔をしかめた。

少なくとも今夜は出してもらえないだろう。

「いえ……今夜は帰れそうにはいないです」

「えつ？ か、帰つてこられないんですか？」

苺の声には、寂しさが滲んでいた。

「寂しいですか？ 私が帰らないと……」

「そりやあ、寂しいですよお」

しょぼくれた返事に、爽の喜びが増す。

「それで、苺、貴女はいま、どこにいるんです？」

そう問い合わせたところで、病院から数人の人間が出てくるのが見えた。
怜が前もって病院に連絡を入れていたから、到着したのに気づいて迎えに出てきたらしい。

「藍原さんの車の中です。いま同窓会の会場に向かってて……」

「そうですか」

どうやら迎えに出てきたのは、溝尾医師(みぞのお)と看護師長のようだ。ここは爽の掛かりつけの病院で、看護師長とは顔馴染みなのだ。そして溝尾は、爽の父方の従兄。最悪なこと

しい。

に、看護師長は空(から)の車椅子を押している。いただけないお迎えに、思わず顔(ゆが)が歪む。
もう苺と話している余裕はない。

「とにかく同窓会を楽しみなさい。終わつてから、また話しましょう」

「わかつたです」

その返事を聞いて、爽は電話を切つた。

5 心もとなさ（苺）

女の子だけの同窓会は盛り上がり、苺は存分に楽しんだ。
ひさしぶりに会う子と話すのは楽しかつたし、結婚秒読み段階なんて子もいて、私もいて、驚かされた。

けれど、話題の中心は、なぜか苺になつていた。幼馴染の翠(みどり)が、藤原のことをあれこれ話して聞かせたからだ。

そして小指に嵌めていた指輪を見て、みんな苺は藤原と付き合つていると思い込んでしまった。
ここまで盛り上がつてしまつと、違うとは言いづらい。

あつという間に時間が過ぎ、解散の時間がとなつた。
苺は店の出口に向かいながら、みんなとの別れを惜しんだ。

「苺は、あのひとが迎えにきてくれるの？」

翠に聞かれ、苺は首を横に振つた。

藍原さんか岡島さんがきててくれるって言つてたもんね。

同窓会が終わつたら、また話そうと店長さんは言つてくれたけど、直接会つて話すわけじやなくて、電話でつてことなんだよね？ 今夜は帰れないって言つてたし……ということは、ワンルームに戻つてもひとりきりなんだ。

……ひとりぼっちじや寂しいし……実家まで送つてもらおうかな。

店から出た苺は、寒さに身震いした。

「うわっ、さつむいねえ」

「ほんとお、たまんない寒さだわあ。あれつ？ みんな駐車場で何やつてるんだろう？」
翠がそう言い、駐車場に目を向けてみたら、なぜかみんな同じ方向を見つめている。

「何を見るんだろうね？」

翠に問いかけた苺はハツとした。駐車場に停まつてある車の側に、ふたりの男性がいる。ひとりは藍原だった。そして車に寄りかかるようにして立つているのは……

それが誰か認識した瞬間、苺は一目散に駆け出した。

「店長さん！」

「きてくれたんだ！」

「苺

呼びかけられて、嬉し涙が滲む。

帰れないって言つていたのに……きてくれたんだ。

「お仕事、大丈夫だつたんですか？」

涙を拭きながら、苺は藤原に尋ねた。

「ええ。それで貴女のほうは？ 同窓会は楽しめましたか？」

「はいっ。すつごい楽しかったです」

「それはよかつた。あそこにいらっしゃるみなさんは、貴女のご友人ですか？」
藤原がみんなのほうに視線を向けて聞く。

みんなこっちを見ていたので、苺は手を振つた。

「爽様、そろそろ」

藍原が急かすように促したが、一塊になつていていた友達はいつせいに駆け寄つてきた。
「い、苺の彼氏さんなんですか？」

「ええ。初めまして」

あちやーっ。店長さんときたら、ためらいもせず肯定しちゃうなんて……

「は、初めまして」

「あ、あの、苺とどこで知り合つたんですか？」

「ずいぶんな騒ぎになつてしまつた。

【爽様】

藤原の背後にいる藍原が、再び急かす。

「そ、爽様？」

『爽様』という呼び方に、みんな驚いていた。

「早く、お戻りなりませんと」

「うん？　早く戻らないとつて……問題はまだ解決していないつてことなのかな？」

「わかっている。……苺、もう帰れますか？」

藤原からやさしく問われ、苺は「はい」と頷いた。そして、みんなに声をかける。

「それじゃ、帰るね」

藤原から車に乗るように促され、後部座席に藤原と並んで座る。すると、藍原がドアを閉めてくれた。苺は友人たちに手を振つて、その場をあとにした。

「店長さん、また仕事に戻るんですか？」

「いえ……」

苺はパッと笑みを浮かべた。

「なんだ。それじゃ一緒にワンルームに帰れるんですね？」

「いえ……」

また否定の返事で、苺は戸惑つた。

「仕事ではないのですよ」

藤原は疲れの滲んだ息を吐き、座席にもたれた。

「疲れてるんですか？」

【爽様】

運転している藍原が、気遣わしげに藤原に呼びかける。

「……大丈夫だ」

ひどくけだる、そうな藤原の返事に、苺は不安になつてきた。
働きすぎて体調崩しちゃつたとか？　あつ、熱があるんじゃないのか？

苺は藤原の額に手を当てた。

うーん、熱くはないようだけど……

「大丈夫ですか？ もう家に帰つて寝たほうがいいですよ」
「それが……今夜はどうしても家には帰れないのですよ」
「苺はびっくりした。こんなに疲れてるのに……」
「でも、お仕事じゃないんでしょう？ それだったら、行かなきやいけないところのひ
とに、いまは具合が悪いからって話して、明日にしてもらえばいいですよ」
「運転席から、小さく噴き出した音が聞こえ、苺は藍原に目をやつた。
い、いま藍原さん、噴き出した？ な、なんで？」
すると今度は隣から、くつくつと笑う声が聞こえた。

苺は顔をしかめて、藤原を見る。

「なんでふたりして笑うんですか？ ゼンゼン笑うところじゃないですよ」

「苺はぶりぶりして、ふたりを見 connaîtんだ。」

「すみません。貴女を笑ったわけではないのですよ」

「それじゃ、なんで笑ってるんですか？」

「苺」

突然真面目な顔で呼びかけられ、苺は藤原を見つめた。

「なんですか？」

「ワンルームに帰りたいですか？」

言葉の真意がわからず、苺は首を傾げる。

「でも店長さんは、帰れないんですよね？」

「そう問い合わせながら、苺は無意識に藤原の手をさする。

「ええ」

その返事に胸が切なくなる。

やつぱりか……。店長さんはどうしても、これからどこかに行かなければならぬいら
しい。

……でも、こんな状態で行かせるなんて、心配でならないよ。

「あの……苺もついてつちや駄目ですか？」

苺は駄目元でお願いしてみる。すると、藤原が眉を上げた。

「ついてきてくださいるんですか？」

「そう聞かれ、苺は驚いた。

「えつ？ ついてつてもいいんですか？」

「爽様」

咎めるように藍原が呼びかける。

「別にいいだろう」

「ですが……」

「要、ワンルームに向かってくれ」

えつ？ ワンルーム？

戸惑っていると、藤原が苺に微笑みかけてきた。

「数日泊まることになりますから、貴女の着替えを用意していきましょう」

「と、泊まる？ あ、あの、どこかに行くんですか？」

まさかまた、旅行に行ったりするんじゃないよね？

「着いてからのお楽しみですよ」

またそれか……。でも、藤原は楽しそうだ。苺はほっとした。

「でも、体調は大丈夫なんですか？ どうしても店長さんが行かなきやいけないんですか？」

「ええ。行かない訳にはいかないんですよ」

「そうか。ならば黙つてついて行くとしよう。行き先を教えてくれないのはいつものこと。

「わかつたですよ。苺、謎の場所について行くですよ」

苺は藤原の手をぎゅっと握りしめた。

「ありや、寝ちゃつたんですね？」
ワンルームに戻り、急いで着替えをバッグに詰め、あたふたと車に戻つてくると、藤原はぐつすりと眠り込んでいた。

「苺が「はい」と答えると、車は静かに動き出した。

「店長さん、すっごく疲れてるんですね？」
「お身体を考えず、無理をなさりすぎるのですよ」

「苺が「ですよね」と相槌を打つた。店長さんはいつもパソコンと睨めっこしてゐる。

飾店でのお仕事以外にも、いっぱいお仕事を抱えてゐるのだ。

「では、向かいますね」

声をひそめて口にする。藤原の身体には、グレーのブランケットが掛けられていた。

たぶん藍原が掛けてあげたのだろう。座席も寝やすいように、後ろに倒してある。
「では、向かいますね」

苺が「はい」と答えると、車は静かに動き出した。

「店長さん、すっごく疲れてるんですね？」

「お身体を考えず、無理をなさりすぎるのですよ」

「苺が「ですよね」と相槌を打つた。店長さんはいつもパソコンと睨めっこしてゐる。

飾店でのお仕事以外にも、いっぱいお仕事を抱えてゐるのだ。

苺は藤原の寝顔を見つめた。青白い顔をしているのに気づき、不安が膨らんでくる。

藤原の目にかかる前髪を、苺はそつと払つて藤原に寄り添つた。

藤原の元気がないと、苺の元気も消えていくような気がした。

6 手に余るお荷物（爽）

目が覚めた爽は眉を寄せた。なんと苺が爽に寄り添って寝ている。

「爽様」

そつと呼びかけられ、爽は運転している要に「ああ」と返した。

苺がワンルームに着替えを取りに行き、彼女を待っている間に寝てしまつたらしい。しかし、ずいぶんと気分がいいな……もうすっかり疲れが取れた気がする。

もう病院に行く必要などないのだが……

まあ、いいか。苺を連れていくことになつたのだ。ならば数日の入院生活も悪くない。パソコンさえあれば、どこでも仕事はできるしな。

爽は苺の寝顔を見つめ、考え込んだ。

彼女の友人から、彼氏なのかと聞かれ、私は肯定した。これで自分は、あの場にいた全員に苺の恋人だと認識されることになるが……

当の苺がどう考へているのかが、いまいちよくわからない。だが、あの場で苺は否定しなかつた。

苺は私のことを愛していると思うのだ……けれど彼女は、私への想いが恋心なのか自覚できていない。

もどかしくなつて、爽は大きくため息をついた。運転している要が気がかりそうにバツクミラー越しにチラチラと自分を見ていて、爽は「大丈夫だ」と声をかけた。数分と経たず、病院に着いた。

「爽様、これを」

運転席から要がマスクを差し出す。これで顔を隠せということなのだろう。見ると、要もマスクをつけようとしている。

マスクをつけた爽は、苺を起こした。

「苺、起きなさい！」

大きく搖すりながら、耳元で叫ぶ。だが、起きない。

「鈴木さん……すごいですね」

要ときたら、感心したように言う。要の口調に爽は噴き出した。だが、笑っている場

早く、病室に戻らないと……抜け出したことがバレたら、まずいことになる。

「苺、いい加減に起きなさい！」

怒鳴りつけたが、まるで反応がない。……まったく、苺ときたら……

「お目覚めになりませんか？」

「……ああ」

「仕方がありません。爽様、鈴木さんは私がワンルームにお送りしますよ」

爽は要を睨んだ。

そんな提案、受け入れられるものか。寝ている苺を要に託すなど……たとえ苺が、どれだけ手に余るお荷物になろうとも絶対に連れて行く。

「彼女は連れて行く」

断固として言うと、要がため息を落とす。

「それならば、私がお連れしましようか？」

要がそう申し出たが、そんなものは却下だ。私以外の男が、彼女に触れるなんて。

「私が連れて行く」

「爽様……いまはご無理かと……」

呆れたように言われ、爽はむつとして「大丈夫だ」と言い返した。

すると突然、寝ていたはずの苺が、「ついて行くですよ」と言い、むつくりと起き上がった。

爽はぎょっとして苺を見た。彼女は、ふあああつと、大きなあくびをしている。いまの今まで、あれだけ起こしても起きなかつたのに……

「あれえ、店長さん、起きたですか？」
寝ぼけ眼で言う。

「もう目的地に……はふう……着いたんですけどあ？ 苺お、荷物持つて……えつとお」
頭がふらふら揺れている。かなり危なつかしいが、なんとか連れて行けそうだ。

「苺、荷物は要が持つてくれます。さあ、行きましょう」

手を引いて苺を車から降ろす。すると苺は首を傾げながら、周囲を見回している。これが病院だとは、まだ気づいていないようだ。

「さあ、こちらですよ。歩けますか？」

苺を支え、夜間専用の出入り口に向かった。苺の荷物を持った要は、少し前を歩きながら、心配そうに振り返ってくる。

「もちろん歩けますよお」

ふらつきながらも、苺はそう答える。爽は噴き出しそになるのを堪えた。

「まだ眠そうですが……」

そう言うと、苺は空いているほうの左腕を振り回した。

「眠くなんかないですよお。ほら、目もかつぴらき」

苺は手を顔の横に当てて言う。
かつぴらきどころか、ぜんぜん開いていない。

爽と要は同時に噴き出した。笑われていることに気づいた苺はきょろきょろする。

「いま笑ったのは……誰ですか？」

眠たそうな顔でむつとして言う。またも噴き出しそうになり、爽は口元を引きしめた。笑っている場合じゃない。

「苺、そんなことはどうでもいいから……とにかく転ばないように気をつけてください」「転んだりしないですよ。ほらっ、苺、こんなふうに、シャツキシャキで歩けるですよ」

苺は身体をふらふらさせながら、足を交互に上げる。

どこが、シャツキシャキだ、どこが！ と突っ込んでやりたい。

まつたくもう、付き合っていられない。爽は苺の腕を、力任せに握りしめた。

「では苺、シャツキシャキで歩いてください」

そう言葉をかけたら、苺は「りょうかい！」と返事をする。

「どちらが病人かわかりませんね……」

苺を抱えるようにして歩く爽を見て、要が呟いた。

要がエレベーターのボタンを押す。

「苺、ほら、エレベーターに乗りりますよ」

「はい。エレベーターに乗りります」

三人はやつとこさエレベーターに乗り込んだのだった。

7 気分は極秘潜入捜査官 ～苺～

身体がふわんと浮いた気がして、苺は目を開けた。そして何かに寄りかかっていることに気づく。

苺はハツとして頭を上げた。

マ、マスクマン！

ぎよっとしたあまり、一瞬にして目が覚めた。

あつ！ な、なんだよもおつ。大きなマスクをつけているのは店長さんじゃないか。

「店長さん。マスクなんかしてるから、苺、知らないひとかと思つてびっくりしたじゃないですか？」

「ようやく目が覚めたようですね」

苺はきょとんと藤原を見つめた。そして、いま自分がエレベーターの中にいることに気づく。

ここは、どこなんだろう？

キヨロキヨロしていると、藍原が「鈴木さん」と呼びかけてきた。

「はい」「すみませんが、エレベーターを降りたら、部屋に着くまで何も話さないでくださいね」
藍原は命じるように言う。

「えっ、訳ありますか？」

「謎の匂いがブンブンし始め、莓はドキドキしてきた。

入ってはいけない場所に、極秘に潜入している感じだ。

店長さんも藍原さんもマスクで顔を隠しているし……

「ねえ、莓はマスクで顔を隠さなくていいんですか？」

期待を込めて尋ねる。

「莓、貴女は、その必要はありませんよ」

「えっ、それじゃ、店長さんはその必要があるってことですか？」

藤原の目が笑つたのがわかつた。

「莓、鋭いですね」

「えっ、当たりですか？」

「当たりですよ」

おほつ。莓は笑みを浮かべた。

エレベーターの扉が開いた。莓は、あれ？ と思う。

「ここ病院じゃないか。なんで病院に？」

戸惑っていると、藍原がすっと前に出て、なぜか辺りを窺うようにしながらエレベーターを降りる。な、なんだ？

藍原はこちらを向いて、シリアスな顔で頷く。

……よくわかんないんだけど……極秘の任務で敵の陣地に潜入する捜査官みたいでかつこいい。わくわくしていると、藤原に手を引っ張られた。

「ゆっくり歩いて、できるだけ気配を消して」

小さな声で藤原が指示を送ってくる。

藍原が先頭になり、廊下を進む。そしてさらに階段を上った。

どこまで行くんですかと聞きたいが、口を開くなと指示されている。

ある扉の前で藍原が立ち止まり、振り返ってきた。藤原が頷くと、藍原は扉を開けた。

「あの……」

「しつ！ 声が響く」

藤原に叱られ、莓は慌てて口を閉じる。

「行きましょう」

藍原は大きく開けたドアを押さえている。莓と藤原は藍原の横をすり抜けて部屋に入った。

病室はとても広かつた。入り口を入つてすぐのところに、洗面所とトイレではないかと思われるドアが二つ並んでいるし、ベッドだけではなく豪華なソファとテーブルセツトまで置かれている。

ドアを静かに閉じた藍原と藤原は、同時に安堵したような息を吐き出した。

いつたいなんなんだろう？ ふたりがこんなにこそそしていいる理由がわからない。

单に入院しているひとのお見舞いにきたんじやないのか？

ベッドに誰か寝ているのを確認し、苺は眉を寄せた。いつたい誰なんだろう？

苺はハツとした。も、もしや……

「わ、羽歌乃おばあちゃん、病気になつたんですか？」

「羽歌乃さんではありませんよ」

「そ、それじや、誰が？」

「爽様」

苺の問いはスルーされ、藍原が藤原に呼びかける。そして、「もしや？」と口にする。もしや？

藤原は藍原の言いたいことがわかつたようで、頷いてベッドに歩み寄る。入院しているのが誰なのか気になつてならない苺は、藤原と一緒にベッドに近づいた。

「どうやら、寝ているようだな？」

「そのようですね」

藤原に相槌を打つと、藍原は上掛けに手をかけた。入院患者さんは横向きに寝ているようで、苺には頭しか見えない。

「まさか、善ちゃんじやないですよね？」

「違いますよ」

藤原がそう答えたのと同時に、藍原は上掛けをそつと捲つた。苺は首を伸ばして誰だか確かめた。

「お、岡島さん！」
苺は目を丸くして叫んだのだった。

8 理不尽な誓い ～爽～

気持ちよさそうに寝入つている部下に、爽は笑いが込み上げてきた。

怜ときたら、案外豪胆じやないか。自分の代わりに、ベッドで寝ているように命じた時には、ずいぶんと不安そうだったのに……

「怜」

要が怜に呼びかけた。さらに肩に手をかけ、そつと揺する。すると、苺は慌てて要を押さえ込んだ。

「藍原さんってば、何してるですか？ 駄目ですよ！」

ああ、そうか。苺は怜が入院していると思い込んだのだな。

「苺」

爽は苺の肩に手をかけ、要から離した。

「だって、具合が悪いのに、起こすなんて……」

そのとき、怜が「う、ううん……」と呻いた。次の瞬間、目を開けて、ガバッと起き上がった。

「あ、あ、あ……す、すみません！ 私ときたら……知らぬ間に寝てしまつて……」

勢いよく頭を下げる。

「岡島さん、寝ていいんですよ。入院してんだもん」

苺は同情するかのように声をかけた。彼女がいることに気づいていなかつたらしい怜は、驚いて目を見開く。

「あの……どうして鈴木さんが、ここに？」

怜は急いでベッドから降りる。怜が着ている淡い水色の寝間着を見て、爽はうんざりした。また、自分がこれを着なければならないのか……

「だ、駄目ですよ、岡島さん。寝てなきや」

「苺、いいのですよ」

「そう言うと、苺は困惑顔で見つめてくる。

「爽様が、どうしても鈴木さんを連れていくとおっしゃるのでね」

要ときたら、わざとらしく呆れたように言う。

「すぐに着替えます。……爽様、これしかありませんが……」

申し訳なさそうに言われ、爽は笑つた。言われなくても、それしかないのは知つている。元々自分が着ていたものを怜に着せたのだから……

「それでいい」

怜は着替えのために部屋の中にある洗面所に入つた。

爽は諂ひ気分でコートを脱ぐ。すると、要がすっと手を差し出して、コートを受け取つた。スーツの上着も要に渡し、爽も洗面所に向かう。

「て、店長さん、どこに行くんですか？」

苺が慌てたように聞いてきた。

「すぐに戻りますよ」

それだけ言い、爽は洗面所に入つた。

それにしても、苺は鈍いな。入院患者が私であることに、まだ気づかないとは。

「爽様。あの、すみません」

怜は水色の寝間着を恐縮しながら差し出す。

「気にすることではないぞ」

「は、はい。ですが……」

「悪かったな」

「はい？」

「面倒なことを押し付けて」

「あつ……そ、そのようなお言葉をいただくと……身の置き場がありません。私ときだら、寝てしまうなんて……」

「疲れていたんだろう」

「それは爽様のほうです。あの……いまさらですが、お身体は大丈夫ですか？」

「ああ、心配いらぬ」

「そう言つても、怜は不安を拭えぬようだ。

怜が洗面所から出て行き、爽は寝間着を見つめた。

こんなもの着たくないのだが……爽は、仕方なく着替えた。

寝間着姿で部屋に戻ると、苺は目を丸くした。

「なんで店長さんが、それを着てるんですか？」

「私が着るべき人間だからですよ」

「入院患者は店長さん？　えつ、でも、ならなんで苺を迎えて？　岡島さんはなんともないんですか？」

「怜には、私の身代わりをしてもらつていただけですよ」

「ええっ！　なんでそんなことをしたんですか？」

苺を迎えて行きたかつたからだ。人任せにしたくなかった。理由はそれだけだ……黙っていたら、苺は急に爽の身体のあちこちを触り始めた。

「どこ？　どこが悪いんですか？　怪我したんですか？　病気ですか？　頭ですか、足ですか？」

苺の動転振りに、にやけそうになる。

「私は大丈夫ですよ。少し眩暈がしただけです。もうすっかりいいんですけど……検査のために入院することになってしまったんですよ」

「め、眩暈？」

苺は心配そうに眩ぎ、爽を見つめてくる。爽は安心させるために微笑んだ。
「爽様。ベッドに入られたほうが……看護師が巡回にくるかも知れません」

「そうだな」

要に促され、爽はすぐにベッドに入った。

「店長さん、大丈夫ですか？」

苺はまるでがるよう声をかけてくる。

「苺、大丈夫ですよ。落ち着きなさい」

「だって……店長さんに何かあつたら……苺は……苺は……」

驚いたことに苺をくしやりと歪め、涙を零す。

「苺、大袈裟ですよ。私は死にはしませんよ」

「し、死ぬとか言っちゃ嫌ですよお！」

苺は爽の寝間着を掴んで引っ張りながら、本気で叱りつけてくる。

やれやれ。苺ときたら困ったものだ。要是笑つてゐるに違いないと思つて視線を向けると、意外なことに、ひどく深刻な顔をしている。怜も同様だ。

これは……対処に困るな。

「そう深刻になるな。この私が、そんなに簡単に死ぬわけないだろう」

「もちろん、そうあつていただかないと困ります」

「いいか、単なる過労だ。ここにいるのは長くても数日のことだぞ。溝尾医師に聞いただろう？」

「安静にしていれば回復なさるでしょう。けれど、爽様はご無理をしきです。いつま

た、倒れられるか……？」

ため息混じりに要が口にした途端、苺が息を呑む。

「て、店長さん！」

「大丈夫ですよ！」

苺を不安にさせた要を睨み、苺に言い聞かせる。すると苺から、「そんなふうに興奮しちや駄目ですよ。安静にしてないと」と言われ、爽は大人気なくもカチンときた。

「興奮させたのは貴女でしょう？」

「い、苺は、興奮させるつもりなんか……ただ、店長さんが……」

苺が肩を落としたのを見て、爽は彼女の頭をやさしく撫でた。

「心配してくださっているのは嬉しいですよ。ありがとうございます、苺」

爽は要と怜に向直つた。

「ふたりとも、心配をかけてすまなかつた。今後は気をつける」

ふたりは頷いたが、まだ深刻その顔をしている。

「遅くまで付き合わせてしまつて悪かつた。ふたりとももう帰つていいぞ。要、後は任せたぞ」

「はい」

吉田には倒れたことをまだ知らせていない。倒れたなんて知つたら、吉田のほうが具合を悪くしそうだ。

「わかりました。爽様、羽歌乃様には？」

「羽歌乃さんに余計な心配はかけたくない。気づかれないようにしてくれ。まあ、明日検査結果が出たら、無理やりにでも退院するつもりだが」

「どこも悪いところなどない。今回倒れた理由は、単なる寝不足だ。今夜ぐっすり寝てしまえば……」

「明日は、さすがに無理ではないでしようか？」

「自分の身体のことは、自分が一番よくわかっている。検査など必要ないくらいだ」
爽様。それは医師が決めることです。必要な検査をして、医師の退院許可が出るまでは、安静になさつてください」

爽は顔をしかめ、「わかったわかった」と投げやりに答えた。

「藍原さん、苺がついてるですよ。必要な検査をしてもらつたあとは、苺がしつかり店長さんを見張つときますから、安心しててください」

苺は要に宣言する。すると要是爽にちらりと視線を向けてきた。無言で睨んでやる。「ほらほら、店長さん。そんなふうにイラついてちや駄目ですよ。治るものも治りませ

んよ」

苺は、なだめるように爽の肩をトントンと叩く。

「これは頼りになりそうですね。鈴木さん、爽様をよろしくお願ひします」

「はい。苺にドーンと任せちゃつてください！」

苺は言葉どおり、大きくドンと胸を叩いてみせる。

少し離れたところに控えていた怜が、必死に笑いを堪えているのを爽は見逃さなかつた。

「いずれ、なんらかのペナルティーを科してやることにしよう。
うっばん晴らしに、爽は理不尽な誓いをしたのだった。

9 したのか、しなかつたのか ～苺～

襟元にイチゴのアップリケのついたネグリジェを手に持つて、苺はため息をついた。
まさか、行き先が病院だつたなんてなあ。でも、これしかないんだからこいつを着る
しかない。

諦めてネグリジェを着た苺は、洗面所を出た。部屋に戻ると、ベッドの枕元にある灯

りだけがつけられていた。

藤原が「苺」と呼びかけてくる。藤原はベッドに入つて上半身を起こしている。その光景を見て、苺は心細くなつた。

「苺、こんなのはばつかり持つてきちゃつたんですよ」

心細さを拭い去り、苺は藤原に歩み寄りながら明るく言つた。

イチゴのネグリジエ姿の苺を見て、藤原はくいつと眉を上げる。

「おかしくありませんよ。病室が華やいで、私も明るい気分になる」

そ、そうなのか？

「では苺、そろそろ寝ましょか？」

「あつ、そ、そうですね。店長さん、早く休まないと」

店長さんは身体を休めるために、さつさと寝なきやいけないのに、苺に付き合つてもらつちやつてるよ。こんなじや、付添人失格だ。

苺は急いで藤原を寝かせようとしたが、藤原は「大丈夫ですよ」と言う。

「入院の必要など、本当はないのですから」

「駄目駄目。ちゃんと安静にしていなきや駄目です」

藤原は仕方なさそうに横になつた。苺はよしよしと頷く。

「貴女も、もう横になりなさい」

「店長さんが寝たら、苺も寝ますよ」

簡易ベッドに目を向けた藤原は、不安そうに眉を寄せる。

「落ちないように気をつけるんですよ」

簡易ベッドは狭い。寝返りを打つたら、確実に落つこちる。

「苺、自分のベッドから、そんなに落ちたことないし、大丈夫ですよ」

「安心できないセリフですね」

藤原は渋い顔で言う。

苺はベッド脇の椅子に腰かけ、藤原の手を握つた。

「苺。私が寝たら、すぐにベッドに入つて寝るんですよ。その椅子に座つたまま寝てしまつては駄目ですかね」

「はいはい。わかつてますですよ。ちゃんとベッドで寝ますって」

苺の返事が信用ならないのか、藤原は顔をしかめて目を閉じた。

しばらくすると、苺の手を握つていた力が抜け、藤原は寝息を立て始めた。

寝ちやつたみたいだ。店長さんは、もう何度も一緒に寝てゐるけど、こんなふうに眠りにつくところを見たのは初めてだ。

店長さんの寝顔……見惚れるほど綺麗だな。
さてと、苺も寝ようかな。そう思うものの、藤原の寝顔から目が離せない。

じっと見つめ続けていたら、藤原がふいに目を覚ました。

「あれっ、起きちゃったんですか？」

藤原は眠そうな目で苺を見つめたあと、枕元の時計にチラリと視線をやる。

「まだ寝ないんですか？ 私が寝てから一時間は過ぎていますよ」

「ええっ？ そ、そんなに時間が経つてるですか？」

「いますぐベッドに入りなさい」

「藤原に命じられ、苺は急いで簡易ベッドに潜り込んだ。

「本当に落ちないでしようね？」

「心配ないですって。ちゃんと気をつけるですよ」

布団を被^{かぶ}った苺は、まるで魔法をかけられたように、あつという間に眠くなってきた。

「はふっ」と、大きなあくびが出来る。

「熟睡した貴女が、どう気をつけるんです？」

「そんなこと……」

苺だってわかりませんよ……という言葉を口にしたのかしなかったのか、苺にはもうわからなかつた。

10 なんとなく嫌な予感 ～爽～

爽は簡易ベッドに横になつた苺を、^{いぶか}しげに見つめた。『そんなこと……』と口にして、

彼女は黙り込んでしまつたのだ。「苺？」と、声をかけてみるも、返事がない。

まさか……本当に、もう寝てしまつたのか？ 寝つきのいいことは知つてゐるが……さすがに早すぎるだろう。

爽はいつたんベッドを出て、様子を窺^{うかが}つてみた。すると、くーかくーかと、苺は気持ちよさそうに寝息を立てている。

「苺！ 言つておきますが、貴女は私の付き添いなんですよ。病人はこの私で……」文句を言うと、苺は顔をしかめてそっぽを向いた。さらに寝返りまで打とうとする。

「ああっ！」

ベッドから落ちそうになつた苺の身体を、爽は慌てて押さえた。ほつと息を吐いたものの、彼女をこのままにはしておけない。いつ落ちるかと気を揉んでいたのでは安眠できない。となれば方法はひとつ。

爽は苺を抱え上げ、自分のベッドに寝かせた。彼女と一緒に寝ていたのでは、そう簡

単に眠れないのではないかと思つたが、さすがに疲労がピークに達していたのか、爽はあつさりと眠り込んでいた。

「藤原さん！」

鋭い声が聞こえ、爽はパツと目を開けた。

自分の顔を覗き込んでいる者と目が合い、ぎょっとする。

一瞬にして、状況を把握した爽は顔を歪めた。

どうやら、すでに朝のようだ。爽の顔を覗き込んでいるのは、看護師長。

「もう朝ですか。師長、おはようございます」

「おはようございます、ではありますよ。どういうことです？」

看護師長は、爽の隣に寝ている苺を指さす。

「私の付き添いですよ」

「付き添いをつけるとの申し出は受けていますが、どうしてその付き添いが、患者のあなたと同じベッドで寝ているんです？」

「簡易ベッドの幅が狭すぎて、彼女が落ちそくなってしまつたのですよ」と、説明すると、看護師長はこめかみを押さえた。

「何を考えていらっしゃるんです？」

看護師長は、爽の隣に寝ている苺を指さす。

「私の付き添いですよ」

「付き添いをつけるとの申し出は受けていますが、どうしてその付き添いが、患者のあなたと同じベッドで寝ているんです？」

「簡易ベッドの幅が狭すぎて、彼女が落ちそくなってしまつたのですよ」と、説明すると、看護師長はこめかみを押さえた。

「何を考えていらっしゃるんです？」

看護師長は、爽の隣に寝ている苺を指さす。

「おや、起きたのか？」

苺は薄く目を開ける。

「てん……」

「目が覚めましたか？」

爽はすかさず声をかけた。苺が『店長さん』と呼んでは、看護師長が私たちの関係を不審に思う。

「は、はい。え、えーっと……」

病室に看護師長がいるのに気づき、苺は慌て始めた。急いで起き上がり、ベッドから降りる。

「まつたく……」

「おっしゃりたいことは、わかつていますよ」

「苺を叱責しようとする看護師長を遮る。

「なんでしたら、いますぐ、ここを出でいきますが」「藤原さん、そういうことでは……」

「入院など必要ないんです。寝不足だつただけなのに、溝尾医師が強引に私を入院させたのですよ」

「溝尾医師は、貴方には休養と精密検査が必要と考えられて……」「まあいい。とにかく、明日の十時までには退院させてもらいます」

「退院の許可は……」

「ええ、溝尾医師に、許可を出させますよ」

断固としてそう言うと、看護師長は顔をしかめ、苺に視線を向けた。苺は慌てて姿勢を正す。

「ど、どうもです。……お、おはようございます」

いつもの苺らしい挨拶だったが、初対面の看護師長は困惑したようだ。対処に困つているのか、苺をじーっと見つめている。爽は「苺」と、やさしく呼びかけた。

「は、はい」

「こちらは看護師長さんですよ」

「師長さんですか？ ど、どうも……鈴木苺です」

ペコりと頭を下げる。爽の目には可愛い仕草に映つたが、看護師長はそうではなかつたらしく、眉間に皺を寄せている。

「鈴木さん、あなたは付き添いで……」

「看護師長！」

爽は鋭く叫んだ。

「苺を責めるのはお門違いだ。かとうらが

「もう退室していただけませんか」

看護師長はもちろん納得していないだろうが、爽の言葉に従つてくれ、苺を一瞥してから部屋を出て行つた。

「よ、よかつたんですねか？ なんか、怒つてましたよ」

「気にすることはありませんよ。私はシャワーを浴びてきます。貴女も着替えなさい。すぐに朝食が運ばれてくるでしようから」「わかつたです」

浴室に向かいながら、爽は小さく笑つた。苺と一緒にならば、入院も悪くない。

シャワーを浴び、すつきりした気分で病室に戻ると、いい匂いが漂つていた。朝食が運ばれてきたらしい。そしてなぜか苺は、ベッドの向こう側から顔だけ出している。

「どうしたんです？」

「どうさに隠れちゃつたんです」「隠れた？」

「だって……苺の服、こんななんですよ」

爽は苦笑した。北の国に行つたときに用意したイチゴの服を着ている。ネグリジェ同様、子どもっぽいデザインだ。

「悪くありませんよ」

そう言つてやるが、苺は納得できないようだ。

「慌てていたから、適当にバッグに押し込んでしまつた。行き先が病院だつてわかつたら、イチゴ柄がらの服は避けたのになあ」

「病室はなが華やいでいいと言つたでしよう。さあ、それより冷めないうちに朝食をいただきましょう」

取り合おうとしない爽に苛立つたらしく、苺は頬を膨らませた。すつと立ち上がりた彼女は、くるりと背を向け、自分のお尻をパンと叩いて見せる。そこには、大きなイチゴのアップリケがついていた。

「見てくださいよ。こんなんですよ。とてもハタチのオニナが着る服じゃないですよ」苺はプリプリしながら文句を言う。『ハタチのオニナ』という言葉に、爽は笑えてならなかつた。

「可愛いですよ」

褒めたのに、苺はむつとする。

「あのですねえ」

「苺、服のことは後回しにして、とにかく朝食をいただきませんか？ お腹が空いてしまつて……」

「そ、そうでした。店長さん、いま病気なのに、苺つてば……さ、さあさあ、食べるですよ」弱々しく言つたら、思つた通り苺は焦り始めた。爽は内心にやついた。まったく苺ときたら扱いやすい。

朝食はとても美味しかつた。

「イチゴヨーグルトがなくて残念でしたね。昼食では頼んでおきましょうか？」

「ええ、病院なのに、リクエストができるんですか？」

「吉田に頼むんですよ」

「ああ、善ちゃん、ここにくるですか？」

「ええ。色々持つてきて欲しいものがありますから……それと、苺」

「なんですか？」

「貴女に付き添いをしてもらうのに都合がよいので、病院の関係者には、貴女は私の婚約者だということにしてあります」

「ああ、はい」

「ですから、私のことは店長さんと呼ばないようにならね」

「藤原」と言ひ聞かせてゐる途中だというのに、ドアをノックする音がした。ついで「藤原」という声が聞こえる。

爽は顔をしかめた。溝尾か……

どうぞ

ドアが開き、パタンパタンとスリッパの音を立てながら、溝尾が入ってきた。もうひとり、若い医師を連れている。溝尾はくたびれた白衣を着ているが、そちらは真っ白な白衣をパリッと着こなしているハンサムな青年だ。

「どうした
体調は？」

まつたか問題ない。溝尾、私は今すぐここを出たいんだが

—やれやれ 桜変れひすがな
いいか

溝尾はそう

「この子は？」

溝尾は爽の質問を無視して、苺をジロジロ見る。

月があるのか
さうして云々で出て行くくれないか」

「そうつれないことを言うなよ。……そ、そ、そ、そ、彼は研修医の白井だ」
白井を紹介した溝尾は、今日の検査について説明すると、あっさり病室を出て行つた。
嫌な予感がした。何か企んでいるのではないか？

「必要ないのに……」

そう言うと、苺は元気づけるように、爽の腕をとんとんと叩く。

「萬、検査の間、ずっとついていてく

溝尾のことが気がかりでならず、爽は苺に頼み込むように言つた。

11 付き添い絡まる ～苺～

検査の時間になり、藤原を迎えにきたのは、さつきのちょっと恐い看護師長だった。莓を検査に同行させるかどうかでまた揉めたが、藤原が莓を連れて行くと言い張ったので、師長はしぶしぶ折れた。

「それじゃ、頑張つてくるですよ」

「苺の励ましに、藤原がくすりと笑う。

「ええ、頑張つてきますよ。苺」

「なんか、気になることでもあるんですか？」

「いえ。苺、私が検査を終えて出でてくるまで、ここから動かないように。ここにちゃんと座つて待っているんですよ」

「わかつてますよ」

苺は笑いながら答えた。北の国に行つたときも、同じことを言われたなと思い出す。

藤原が検査室に入ると、苺は長椅子にちょこんと座り、北の国での思い出に浸つたのだった。

「鈴木さん、でしたよね？」

検査室のドアをじーっと見つめていた苺は、呼びかけられて顔を上げた。

声をかけてきたのは、病室に溝尾と一緒にやつてきた、研修医の白井だ。

髭面の溝尾さんはお医者さんらしくないけど、このひとは見るからにお医者さんつて感じ。

「隣に座つても構いませんか？」
「苺に断ることないですよ。どうぞ」

白井が座り、苺は視線をドアに戻した。検査つて、どのくらい時間がかかるんだろう？

「藤原さんが心配ですか？」

そう問い合わせられて、苺は白井に目をやつた。

「そりやあ心配ですよ」

退院したら、もうちょっと仕事をセーブしたほうがいいですよって、言ってやろう。
「この検査は、三十分以上かかりますよ」

「そうなんですか？」

「ずっとここで待つていてもなんですし……僕とお茶でも飲みながら待つというのはどうですか？」

「お茶？」

苺は思わず白井の言葉を繰り返した。白井がなぜ苺をお茶に誘うのか、さっぱりわからぬ。

「ええ。一階に喫茶店があるんですよ。パフェなんかもありますよ」「ええ、病院でパフェが食べられるんですか？」

意外な事実に、思わず問い合わせてしまう。